

## 衣食足りて、栄辱を知る～現代人に問いかける『史記』～

酒井 和（教員養成課程国語教育専攻）

「倉廩<sup>み</sup>実ちて、則ち礼節を知り、衣食足りて、則ち栄辱を知る」という一節が『管子』牧民篇に記されている。

道徳が先にあるのではなく、生活の余裕があって、はじめて道徳がついてくるという考え方である。人間が礼法と節義を知り、なにが栄誉か、なにが恥辱かを自覚するようになるためには、国庫が豊かになり、衣食が充足するのが前提である。経済が安定してこそ、人間はモラルの涵養に心がけるようになるのだ。

（本書第四章「衣食足りて、栄辱を知る」より）

先の東日本大震災において「衣食足りて、栄辱を知る」ということを痛感させられた人は少なくないのではないだろうか。被災地における略奪行為や、都市部を中心とした地域での買占め行為が報道される度に、複雑な思いが込み上げてきたものである。これらの行為に対する痛烈な批判もあるが、いざ自分がその立場に置かれたときに、果たして同じように批判できるだろうか。

孔子を中心とした儒家の思想では、行いが清らかで私欲がなく、そのために貧しいという「清貧」こそが良しとされてきた。例えば、道に志し、仁につくと決めた以上、それを貫くために陥った貧困ならば、かえってそれを楽しむべきだという考えである（『論語』述而篇）。私欲に溺れ、利を追求する者を批判的に捉えようとする考え方である。かかる考えは今日の我々の中にも根付いていよう。日本においても土農工商という身分制度の中で、商人は利を追求する下賤な者とみなされていた。如何せん私利私欲を追求する人間は悪いイメージを持たれやすい。

そこに一石を投じたのが司馬遷『史記』の中の「貨殖列伝」なのかもしれない。この「貨殖列伝」でとりあげられた富豪家たちは、素封家という言葉にふさわしく、天子諸侯から授けられた官位も、与えられた領有地もなく、ただ己の才覚を存分にはたらかせ、富材を築きあげた人々である。司馬遷はこの列伝で、いかにも物質主義的で、儒学でいうところの聖人と相対した人々をとりあげ、賞賛している。現代に生きる我々の中にもこのことに違和感を覚える人がいるかもしれない。儒学が重んじられていた当時であれば尚更であろう。しかし、異端者とも言える司馬遷の考えは、自由奔放でありながら、しっかりと現実目に向けた実践的なものであった。当然のことながら、司馬遷の考えが理解されるのにはかなり

の時間を要した。そして、この突飛な思想にスポットライトを当てたのが本書である。

本書では「貨殖列伝」について細かく考察されている。しかし単に人々が欲望を追求することを礼賛するものではない。冒頭に挙げた「衣食足りて、栄辱を知る」ということを裏打ちするものである。堅実に富を蓄え、礼節を重んじる素封家たちを細かく分析し、今日の私たちの経済活動に対するヒントを暗に示している。欲望を否定せず、むしろ肯定し、投資や生産、売買などの経済活動を積極的に推奨することで国を豊かにする考えは、アダム＝スミスの自由放任主義、つまり現在の日本やアメリカ、ヨーロッパなどの先進諸国の経済活動の根底にある思想に通じるものがあるだろう。そして、それによって富を得た人々のあるべき姿を筆者林田氏は「貨殖列伝」を通して我々に訴えかけている。つまり、富むことではなく、富んだ後の我々の振る舞いに重点を置いているのだ。日本に住む我々は平和に甘んじ、それなりに富を持つ者がほとんどであるが、本書を手にとることが己の立ち居振る舞いについて見直すきっかけになるものと思われる。

本書は、経済的な面においても政治的な面においても学ぶべきところの多いものである。『史記』がそれまでの精神論的な思想に囚われない、実践的かつ現実的な書であることに注目し、今日にも通じる政治・経済の参考書としての『史記』を紹介しているという点で、本書は大変奇抜で興味深い。資本主義社会に生きる我々にとっては、何かと興味をそそられるものも多いだろう。金に汚く心が荒んでしまった人々で溢れかえっている世の中だと嘆く人にこそ、本書を手にとっていただきたい。それまでとは違う視点から、世の中を見つめなおすことができるようになるだろうから。

林田慎之助著『富豪への王道 史記・貨殖列伝を読み解く』  
（講談社 2007年）